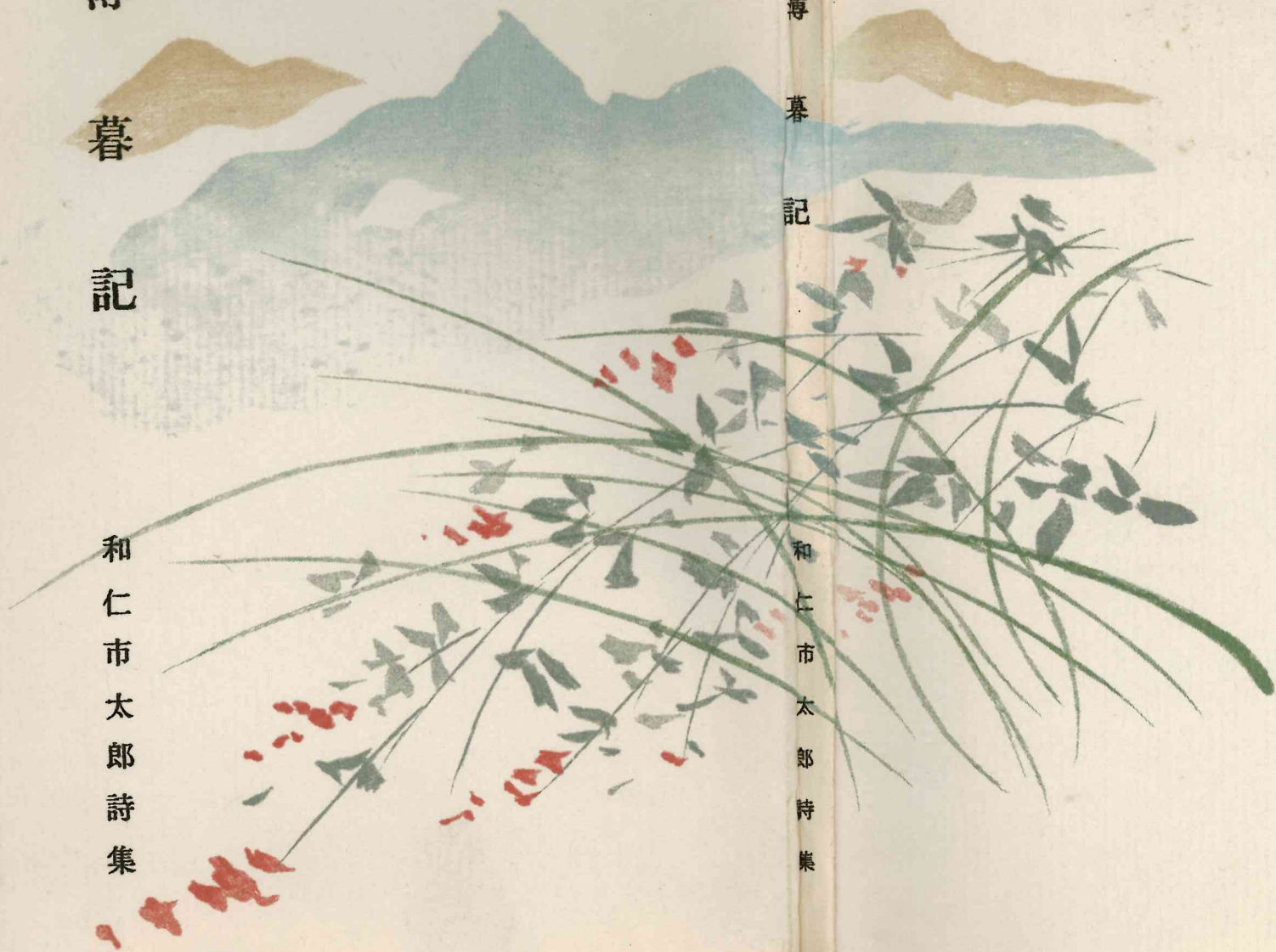


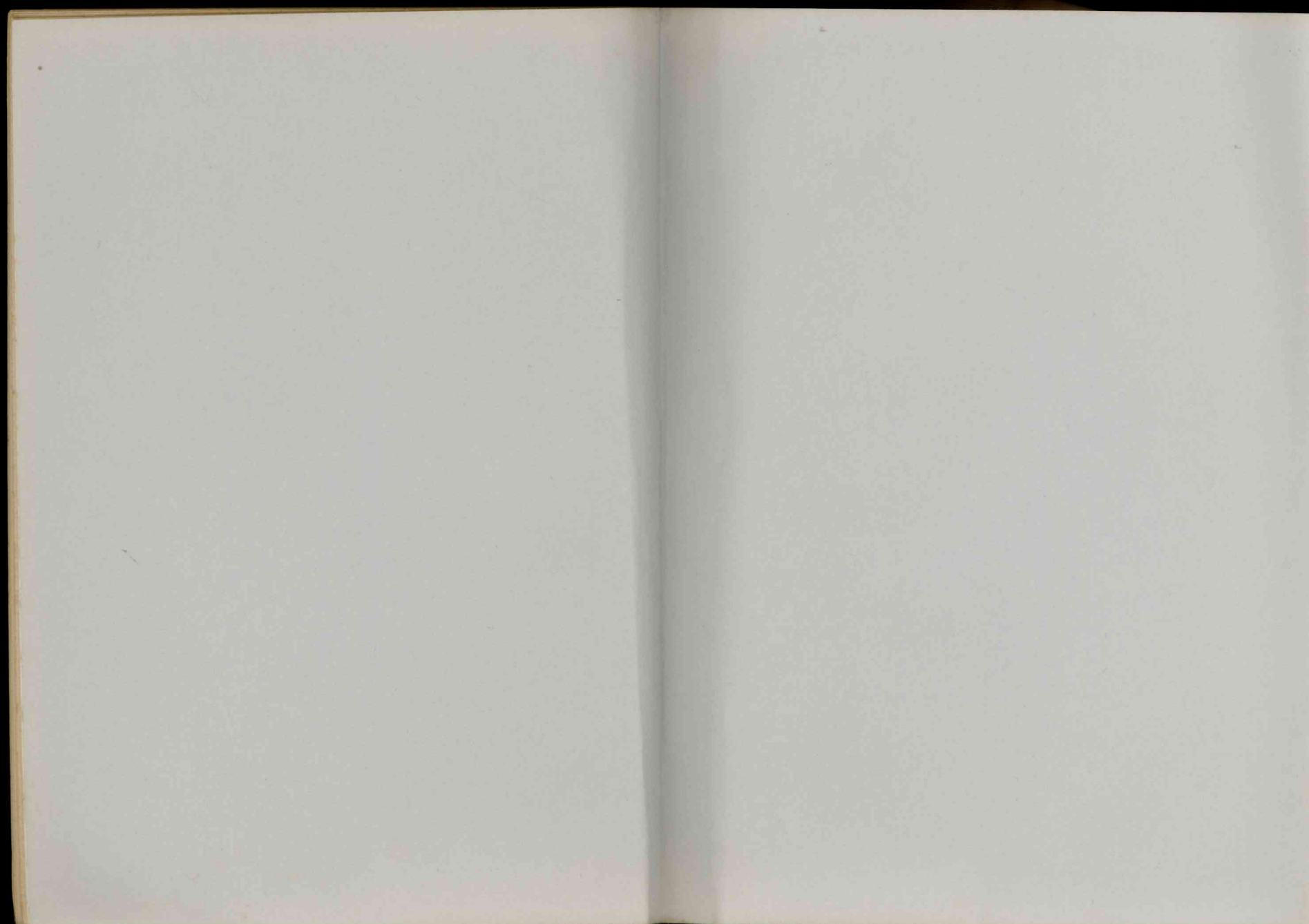
薄
暮
記

和
仁
市
太
郎
詩
集

薄
暮
記

和
仁
市
太
郎
詩
集





詩 集

薄 暮 記

和 仁 市 太 郎

表紙繪
似顔繪

故
前
田
万
岳

東 菴

臨 菴 齋

瀨 太 市 口 町



和仁氏之像
万寿

和仁氏之像

田



しかし 詩人は

あとに残るものを築かねばならぬ

ヘルダアリン

序 詩

ふたたび羞かしい記録をここにつくらせた
生きたこと 物を考えたこと

こんな人間が地上に育ったことも
無為にながし人生を徒食したことも

誰にも知られずこの地上から痕跡もなく消されて

丘の上の原っぱに葬られたい その上を子供たちが遊

び跳ねて――

それはいつも心の片隅にある祈願なのに

むなししいこの業にとり憑れて

所詮私もまた世俗に生きる平凡な人間で いやらしい

垢を塗りたくり恥を重ねてしまった。

今は遠く

子どもたちが大きく育つてくるにつれて
父の手の届くところには棲んでいなかった
何を想っているのか想像の絶した世界で
自分たちの幸せを掴んでいようだ

黄色に汚れたおむつをきたないとも思わず
河原に降りて濯いでは干かわかしてやった――
妻のいないときは幼ない子どもの細い脚の間に
おむつを十字にならべては取りかえてやった――
いつ赤召の赤い紙がとどくかわからない戦いのさなか
風呂に入った時など真珠でも磨くように

丹念に背中にシヤボンを塗っては洗つてやった――

幼ない子どもたちの未だ熟さない肉体と
爛まんな瞳にうつる喜びと悲しみを
いつもこころのすみに受けとめ
呼べばすぐ傍で応える素直さに
父の掌が支配する感覚と把握とで
若い父は幸福をはっきり抱きしめていたのに

しかしいまはもう世界の事情が遠つてきた
巢を飛び立った小鳥たちは
自分の羽根で自由に翔とび交い
かつて父の膝にだまって小便を垂れたことなど
とっくに子どもたちは忘れはてている。

薄暮記

メぐれが一つの仕事の区切りにピリオドをうって
仰若葉のほの明るく照りかえす仕事場で
ソかれた貌に蒼じろい安堵の色がなかれる
日を駆使された伴侶の鉄筆を
しずかに命あるもののように机の上に横たえる

いつからか老眼鏡のなかで拡大された文字を

産卵する蚕の蝶のように再念に

ニミリの原紙のますに並べてきた

もはや悔悟もなく慣らされた多年の習性に

一日々々よそみもせず生きてきた

他人の境涯をうらやむことより自分の道に徹して
爾後の生を托さねばならない

今日なさねはならぬ予定の仕事が

順序よくしまわれた気安さが急に

一つの疲労を倍加させて私は暮れゆく

柿の木の上枝のその遠い茜色の雲のただずまいに
しばらく瞳を空虚にして眺めている。

老 樹

その老樹の傍らを通るとき

人びとはふしぎな生命の厳しさとせつなさに
しばらく佇み瞳をそこへうつすであらう

細くきやしやに垂れさがった枝のさきざきに
緑りの生命のしずくが点々と咲き

和やかな町の風景を春のなかに置きかえる

北風に粉雪が劇しくその老いた肌をゆさぶり

いのちの絆もたたれる永い冬の間

じつと再び巡りくるものを待つていた――

生きていてよかつたと思うものはお前ばかりではない
人生のいくつかの峠を越えてはきたか

涸濁なる絶望の視界につまずくようなある時間

孤絶にひしがれ岩壁に追いこまれ進退のきわまった時

一つの灯となつてお前への思慕が始まる――

脈々と新しい力が体内のすみずみまで春を喚んでくれ
る。

えにしだ（金雀児）

夕暮が庭のえにしだの芽ふいた
緑の枝々の影をしつとりと吸いとり
薄明の幕が下りようとしている

きよう一日の平安な生活が終った祝福の鐘の音が
高い穹のうえで鳴りひびき
妻が貪しい食卓の飾りに智恵をしぼっている
やかて子供たちがつきつきと慣らされた習性で
その回りに嬉々と集ってくる――

しばらくでその団欒の時間が訪ずれる前
わたくしはたわむほと蝶形の花弁をつけ

自己の重さに感溺しながら微風に揺れている下に佇っ
てみる

そこだけがほの明るく神でも棲んでいるのか幽暗のけ
はいがふかく漂い

近づける自分の顔が花の精に染まるように蒼白く浮き
だされていよう

五十年のながい年づき多くの人たちに愛され
自分もまた微力でも精いっぱい愛情を注いできた
ともかく自分なりに年輪を刻んできた

声を高くして幸福な過去だったと手を揚げよう

枝々の花群を徐々と静かに降りてくる夜への訪ない

この一つの自覚に明日はまた新しい生きかたを発見す
る。

山路で

山肌には残んの雪がいのちを断つ瞬間まで
生きつつける姿に似て雪しろを垂らしていた
林業試験場へのぬかるむ山路を自轉車を押して登って
いて

振りかえつて見ると雄大な乗鞍岳が裾をひろげ
間じかに高く潔い大理石の肌をあらわしている

十年、二十年のあとに――

その時自分は枯れがれとした墓石の下で眠っていて
子供が仕事の見積書や印刷物の納品に
いま歩いてくるこの坂道を登るのではあるまいか

その若澁な容姿がほうふつとして眼に浮ぶようだ
貧窮と仕事に追われ寧日のない生活が

二代、三代と宿命のように血脈のものに押し寄せてく
る

生れたことを素直に感謝したことは過去に幾たびかあ
ったが

この頃「生れていなかったら」と、自問してみる時が
自分を領してならない
簔笹が風になびき松籟の音が高い空で鳴っている。

山 清 水

街の雑踏の巷のなかで 炎熱にとけるアスファルトの上で

追いたてられるように駆け歩く一とき
ふと慈母のようなあなたに想いをさせる

地の底より湧きあがる清冽なあなたの生活のうたに――

風に揺さぶられて鳴る風鈴にも似た

庭前の柿の樹に夕暮れの涼しさを撒いて鳴く蝸の声に

も似た

あなたを想うと生活の疲れと暑気が一度に吹つとび

暑熱に喘えぐ炎天のもとで驟雨のように心を濡らしてくれる

峠のあの幾くまがりの道を、今は誰も歩いて登るものがいなくなった

一日何百台のトラックやバスが砂塵を巻きあげて登りおりした

かって、あなたの冷めたい眞清水に喉をうるおした謙もが

いまは見むきもせず、ここに泉のあったことさえ回想のうちに浮ばせない

私はよくその坂道を自転車を押しては登った

それが三伏の酷熱の時季であつたら

流れる汗をふきふき楽しんでに踏む足に力を加え

車を止めて道したのあなたの傍にいつも立ち寄った
大きい楓の古木の根もとで　あなたは人が知ろうと知
るまいと

こんこんと汚れも知らず湧いている山清水
小さい砂礫の粒がリズム正しく洗われるようにもくも
くと溢れ湧くが

溜りもせず清らかに沸々と湧きあがり谿に流れる
深い山懐ろの岩のすき間を汙過され

蒸溜水となつて雲の流れるのを撮している泉

あなたは立ち寄るものを拒もうとせず

誰にも同じような美泉の甘露を掬するものに與えたの
に――

今も年ふりた楓の根っこで一秒の狂いもなく

あなたは惜しみもせず溢れる清水を湧かせて歌を唄っ
ている。

墓地で (一)

わたくしでも　こころの隅の底に
記憶し温めて懐しく思わなかつたら
あなたを知っている人は
この地上にもういなくなつてしまふ
はやあの時から五十年が過ぎてしまつた
油気の少ない蓬髪に白髪が年ごとに増してきて
わたくしの人生もたそがれのかなたに
ピリオドをうつ境涯に置かれることになつた
早春の雪のない故里の街をはるかに望まれる
丘の上に久しぶりに立つた
周りには華やかに磨かれた石碑が

妍を競つて世にあつた時の栄譽を誇り建っているのに
あなたのは高原川から拾い上げられた自然石の墓碑で
その上を土地の童児たちが踏んで遊んでいても気づか
れない
若く、美しく、十九の秋胸を患らつてみまかつたあな
たが
幼なかつたわたくしを負ぶつてくれた記憶は
母の時おり語る傳説のなかで今日も花を開かせてくれ
る
一握りの線香にする、火で火を点けると紫の煙りが
枯草のうえを流れてゆき
思いつきり冷めたい水を自然石の墓にかけると
胸のなかを言葉にならない安らぐ想いが通りすぎてい
つた。

キャンプの夜

八月の初めであったが、ここではもう秋が訪ずれ
新穂高野営地の夜は冷えびえと寒く
天幕のなかで一枚の毛布にくるまっていと
冷えたからだが大地の底に陥ちこんでゆくようである

きつきまで騒がしくうたっていた
若い人たちの晴ればれしい歌声は
吃立した山岳の懐ろに吸われていつてしま
夜がふけるにつれて蒲田川の溪の音が
山塊にこだまして夜露をうけた天幕に響きかえってく

る

清澄な山気に同化された自分のところは
徐々ではあるが澄んでくるのがわかる
求めていたものはこれだと心に言っ
て聞かせる
平凡な想いではあるが生きていてよ
かつた
死んでいなければならぬ時が過去の
時代に
幾たびかあったと、その情景が
脳裡を一瞬過ぎてゆく

遠くへきた、ながい乗合自動車に揺
られてきた
古い昔から地図のうでで憧れの瞳を
たかぶらせ
ひとの書いた旅行記で名じんでいた

奥穂高の温泉郷の夜が現実に自分のものであった。

葡 萄

夏の去ってゆく午后のひと時
日よけに植えた窓ぎわの葡萄の垂れた房々が
うすく紫色に透明して熟した甘い香り
自然の攝理といえはそれまでだが
なにか大きい恩寵の力をそこに感ずる

北上していた颱風の進路が中国大陆にむけたと
さっきラジオは報らせていた
さわやかなる風が広い葡萄の葉ふるわせて通りすぎ
鉄筆を握る私の手の疲れをしばらく休息させてくれる。

霜の降る夜に

こよいおそい霜がおりるのだらう冷えびえと
幼ない蛙の鳴きごえもとぎれる

印刷機のしたに素足を組合せて

自分の体温で自分を温めている

この世に自分のほかに頼るものがない私か

二十余年まへの雪の霏々とふる一月の終り

神原峠のけわしい幾曲りをトラックの上で

荷物と一しよに凍えて運ばれてきた

縁者もないいとなみの術も知らない若い一途に

なりわいの拠点をうつした無謀の出發か

いつも頼めるものは二本のほそい腕であつたと思う

登校のまえに朝あさ牛乳を配ってくる少年も

父を亡くした近くの母子寮の童児たちにも

非膚な石のように冷めたい眼で生育を眺めてやれるの

は

そこから負けずに立上つて貰いたいため！

負けん気の剛情な雑草の根のような

しぶとい生活力が心のうちに宿って貰いたいため！

自分で自分を温まらせさなきより還る蝶のように

二つの足を重ねて暖をとり一枚々々紙を刷つてゆく。

辞書

その日は街に粉雪がさらさらとふっていた
私の手に大槻文彦の「大言海」が握られていた
雪が掌や頸にふりかかって冷めたくはない
ごむまりのようにはずんで脚が
さくさくと雪をふんで家路にいそぐ
ずっしりと手応えのある重量感が
わき上ってくる喜びを内省させる
なめし皮の濃い茶色の背に金文字で
「大言海」の文字が金色にさんぜんと光っている
昔のように言うならば菊倍版二千数百頁
その代金三千七百円なり

一代の晴れがましい失費にこころふさぐものがある
三十年私の胸のなかに燃えつづけた悲願が
雪の道を酔うように私を歩かせていた。

孤り坐して

夜業を終えて離れの仕事場から棲みかへ帰ると
もう家族のものはずかしく寝ていた
疲労が急に襲い空腹が寂しさを増してくる

裏島に出ると十七日頃の月が
中天に明るく冷めたく懸っていて
ねぎ島の葱に銀いぶしの霜が降りている
私はつるし柿のよく熟したのを拱び
二つばかり縄を解いて家にもちかえる

くる日ごときまったように仕事に追われて
自分をかえりみ物を書く時間も与えられない
今日は師走の半ばを近く
私の人生もことしのように既に終わった

独りで食べる熟し柿が蔵ふの底に
冷めたくとけこんでいった。

梅雨の朝に

窓のそとはつゆの晴れまの庭で

白いばらが雨に叩かれて花びらを

重たく土のうえに堆^{のたま}ねている

ここ数日こころに覆いかぶさってくる不安な想いは

玻璃窓のガラスの曇りからであろうか

山王の柱の緑の濃い風景は濁っている

緻密と根気を要する仕事にかかる前の

落ちつきと熱情を調えるために

古新聞とぞうきんをもってガラスを磨いた

子供のように丹念にそして無心に――

蠟原紙が乳白色にしつとりと手ざわりのしたわしく

鉄筆一本に生涯をかけて一途にかりたてた

この境涯から無謀にも脱出を試みるときもあつたが

ともかく私を引きずってきたのは

おののきに似た仕事への喜びであつた

きょう一つの微細克明の仕事にむかおうとして

重くのしかかかってくるものを払いのけた

テーブルの埃りを拭きとり

ワネツキの稿の葉っぱの鉢を並べて

雨の晴れたこの朝おもむろに老眼鏡をかけるのである。

血脈

期せずして

二十一日は私を育ててくれた父の命日

二十二日は私の本当の父の死んだ日

九歳の秋、実の父が死んで四十七年

育ての父が敗戦の暮に逝つて十八年

この二日つづく父たちの死んだ朝の一ととき

仏壇もなく箆笥の上に

戒名だけを安置して祭った壺前に

一はいのお茶を供へることにしている

声咳に接したこともなまの顔も知らない子どもたちに

縁のないはるかに遠い血脈の人と嘯わっているだろうが

私にしても無信仰に近い日々の生活のなかで

靈魂などの存在することは信ぜられないが

こうしなればやりきれない寂しさに

せめて私だけでも生きている限り

かすかな想い出をかきたてて朝のひと時

父たちの御魂にしばらく話しかける。

雉

窓をあけて庭をみた
庭にはいちいや柿の木、藤、松などが雑然と
積った雪にあらかつて立っている
降りつづいた雪がやんで原色の蒼い空がまぶしく目に
飛びこんでくる

山王の裏山の禁猟区から飛んできたのだろう雌の雉が
三羽
枝々の先きに残った錦木の実を啄んでいる

翠り黒くつやめいた羽毛が陽に光りかがやき
眼は柔和に赤く賢こく空をうつしている
私と二間ほどしか離れていないのに安堵した姿勢で
人間を怖じること疑うことも知らず
啄ばむ腎を休ませたあいまに
じつと私のほうを眺めている。

春の音

家のものが寝しすまって自分の耳だけが
暗やみのあやめもわからぬ空間を
静かに訪ずれるその声をきいている
枕もとの頭のすぐそばの土壁をへだてて
溝をながれる水声のとうとうたる
春を呼ぶ声をきいている

暖かい雨が一日ふって雪の消える
点滴の屋根をたたく音がきそく正しい
一つの諧調となつてささやく
なまめいた風に水かさが増して
そうそうと春のちかい山飛驒を訪ずれる山気が

寝部屋にいる自分にせまってくる

糊のきいた敷布をかぶせた清潔な蒲団に
ながながと横わりふと残された人生について考へる
ことしも春に巡りあえる喜びを
しっかりと心耳にうけとめると
「自分はこれで幸福なのだ」と自分に言つてきかせる。

菊を移す

その日の夕暮れ私は白菊の苗を移植した

新しい素焼きの鉢に肥料などを交せて――

梅雨にはいった頃挿した菊は伸びて

もう永い間無言の訴えを送っていたらう　鉢に移され

るのを――

責められるように負担が心を重くしていたか

今日すこしの暇をみて責任が果せた

秋には大輪の白い菊が重たく粧うであろう

私もいつか五十歳になつて

他人にいくたびか偽られたまされてきた

人間でないものに信頼をかけ

愛情を注いでみたかった

横に出た柔かい芽を爪で調え

病葉を根気にむしりとつたりした

夕食の膳に妻の心づくしの一本の徳利が出て

盃をもった手に菊の香がほのかに移っていた。

落葉

秋には珍らしい小春日和の温かく
香ぐわしい落葉の匂いに甘えて一日を無心に

公園の樹のあいだに遊びつかれていた

二人づれの若い人たちの姿も一組一組

腕をくんだその顔にみちたりた想いを輝やかせて

桜並木の坂道をしずかに降りていった――

さらさらと風が生きもののように葬らいの唄をうたう

と

色とりどりの落葉は舞いあがり吹き寄せられていった
僕だけが静寂に還った大地にしやかみ逝く秋の言葉を
聞いている

きよう一日を耀やき平和に自転しつづけた太陽が

遠い白山のあなたに沁んでゆくこうとしている

にぶい落陽の閃めきが裸木の木立の群れを

巨人の脚のように影がながく尾をひいて

僕はぎよつとその影におびえて立ちあがる

誰か呼んだようにふと馳けだすが

遠い誰かの木霊であったか知れない。

万年青

二本の柿の樹が夜の幕りのなかで風葬をつづけていた
木枯らしのふきつゝの深いよる、低い枕に臥している
玻璃窓のかなたで――

葉の一枚々々が諦悟のおもいに大地に還つてゆく
彩られた錦の豊麗な色素を惜しげもなく――
その下に植えている幾株かの万年青が濃い青さを拵げ
巖から雪にかわつたけさの座に
誇った姿勢でつづらな朱い実を髪挿しの珠のように耀
かせている
いきいきと、身にふりかかる雪と

凍み徹る寒さに抗らつて明日の運命も知らず
自分を活かしきつた生活の確かさ　気高かさ
私も負けてはならない叱責の声を
朱い実の一つから聞いた、確かに耳朶に巖しく
造物主の神はそこにただずまれている。

サルビヤの路

ことしの夏がゆく高原の町では
どこの空地にも花壇が設けられて
サルビヤの花が王者のように咲いている
傲岸に血しおをほとばしらせ
いちように秋を喚んで真赤に咲き競っている

むかし親しかった人の訃をきく日――
友情のきずなは永久に断ちきれてしま
還つてくるものはただ苦澁な後悔の想いと

のこされたものの独り歩く寂寥だけ
悲しみを語るすべもなく赤い花の路を歩いていった
逝く夏の太陽の直射をあびてサルビヤの花は不吉に
影もおとさず原色の氾濫は私の頭脳を狂わせるように
つづいていた。

独
白

自分もひとくぎった時代、

どの少年も一度はいだくであろう未来に、生をたくした時があつた。自分も世間ふつうの市井の子であつた。

た——

しかしいま違つてかんがえがかわつた。

人はまだ若いというが、想うことはいつも、

すでに過去となつた杏い昔のことである、

自分にあたえられた才分と経てきた時間が、

すこしはかしく分別を自分におしえてくれた、

わかかくして郷関を出て生涯の大半を、

見知らぬ土地で無為に甘やかしてすごしてきた、

不しあわせは故郷の土をはなれた二十歳の秋から、

自分の肩におもく落葉のように堆つてきた、

こころの底の眞実の言葉をきいてくれる友もすくなく

三十有余年は一睡の夢のように過ぎてしまつた、

悔悟だけが半白の頭のうえに重くのしかかつてくる

山脈のうえの雲を茜色に染めて夕暮が、

窓辺にしずかにおりて一日が終焉をつける。

遠 花 火

人びとの流れより離れてきて山裾の田んぼのわきで
独り遠い街の上の花火を覗いていた
あたりがもとの静けさにかえると
足もとで虫たちが競って合奏をはじめ
いちめんにつづく穂のはらみかけた稲のうえを
涼しく渡ってくる微風が甘ずっぱい香りを
鼻口にくすぐったく戯れ去ってゆく

美しく華やかな七彩の火の宴が
夜空にさまざまのレースの模様を描いては
はかなく闇のなかに消えていった

ちようと私が希いつづけた人生の夢が
空しく散りじりに壊されていったように――
散りさる時にもなお晩節を美しく飾った花火
私もいつか老醜といわれる時代に入ろうとして
美しいいのちの滅ぶ時の華やかさに憧れる
独りでいると華麗なる饗宴のあとの寂しさが
倍加された深さに自分が突きおとされ
明るい街の人の群れへ戻っていった。

老梅

— S 氏に捧げる詩篇 —

流れに沿った片側の道を通ると
黒い板塀より空に伸び年を古りた梅の木は
季節の訪ずれをきとくその樹肌に感じ
なかい風雪に堪えてきて今年も
春をはやく馥郁と白い花を匂わせた

その老梅よりもなお厳しく
藪柑子の実が朱い庭に面した一劃の
つめたい畳の座に端然と
七十余年のま歴を一つの道標に

生きてこられた古武士のような老骨

あなたの太くながい眉毛が霜を帯び
翁の能面に似た額にきざまれた深い年輪は
世評をそとに孤高に魅いられ
自我をつよく主張してこられた
あなたのからだは枯木のように老いてはこられたか
思想はいつも若もののように世界を卓見し
老梅のように香ぐわしい匂いを放っておられる

夕闇のせまるせゝらぎの水声をきいて
そこを通る誰にも失った一つの記憶を甦えさせる。

鵪 鶉

あさ戸を開けて庭にたつと鵪鶉が死んでいた

ほろほろと柿の白帯黄色の花が冠りのように散りしい

ている下に

黄色い腹の羽毛を6の字のように曲げ

小さく細くやせて澄んだ瞳は固く閉じて

流れる雲も花も撮っておらない

山蟻が五六匹がすでにこの死者の嘴の廻りに集って

浅ましくも営々と立ち働いている

今日は一日 私の持った鉄筆の手に力がこもらず

鉛板の上を空転し重くこころが閉ざされた

何ものに襲われたのか幼ない生命が昇天していった日

夏の近ずいた雷鳴がひとしきり柿の木の上で鳴っていた。

祭りの日に

雪しろ水が宮川の岸をひたひたと洗っていた
鬮鶏衆の鉦の音が街の空で高くこだまして
柳の重れた枝の先きざきに訪ずれた春が
薄い緑りの芽を吹き揺れている

少し酔った瞳で橋の欄干によつてみると
金色の瓔珞の房々が触れ合うかすかな響き
緋色 金色 黄色の豪華に耀く屋台は
にぎやかな祭り囃子に一台 二台 五台と
まっくろく漆に塗られた大きな車を軌らせて

私の前を肅々と渡つてゆく――

一文字笠に袴 紙緒草履の装束で
屈託ない警固の人は静肅に過ぎてゆく――

戦いが終つてもう十有七年が閲みして
誰がこの平和な時代を迎えると予知したであらうか
生きて還らなかつた多くの無名の兵士
生きていて無為に時流に押し流された私

ここでは時間の歯車は逆回転するフィルムのように
つかのまに一世紀は私を昔に運び
その古風なみやびやかな警固の列に私を加えていた。

夾竹桃

花が咲くまで　そこにやせたひと群れの花茎が
落合っていることも忘れさせているか
時秒の推移がただしく　あまねく恵み
紅い花がその存在を知らせるように咲く

私たちのように　私たちの生活のように
肩を抱き手を組んで同胞のものが絶えず嵐のなかにた
っている

人に忘れられ　社会からうとまれて扱われなくなり
花を咲かす遠い日のために草むらのなかにたっている。

蟋蟀

秋が訪ずれた清々しい夜の気配に
湯槽のなかに瞳をじっとつぶっている

今年もまた一匹の蟋蟀が迷いこんできて秋を奏でてい
る

事務を引継ぎをする忠実なる官吏にでも似て
忘れずに正しい時の到来に歌うべき宿命を鳴きつづけ
ている

せまい風呂場の隅のすり減らした糸瓜の蔭にでも身を
隠しているのであろうか

静かに飛沫もこぼさず湯槽から出て
鏡に向うとのびた髭を根気に剃っていた。

路傍で

— 或る童児の死を悼みて —

秋のひややかな雨が白くふっている
舗装されたコンクリートの路面を洗い潔めるように
きのうここで五つになつた男の子が
一つになる弟をお守りして一瞬のうちに
その稚ないものの肉体を自動車か押し倒し
乗りあげて走りさり短い生涯を奪つたのだ
ほそい骨を粉々にくだき幼ない肉体を押し
血潮は飛散して路面をあかあかと染めた

いま雨のふる路傍の片隅みには

そまつな空瓶に白菊や黄菊の花が
濡れぼそつて供之られてはいるが

誰もそこにたちどまつて哀悼の意を捧げるものもない
い

悲情のように忽忙と幾台かの自動車は
泥のしぶきを容赦もなくかけては駆けすぎる

私は自転車からおりて服の袖をぬらし
顔も知らない童児の不慮の死をいとしみ
五年ばかりこの世に生をうけてむごくも
死んでいった壺に想いをはせた
言葉にならない憤懣の思いが燃之上つてはくるか
いったい誰に叩きつければよいのだ。

柿 紅 葉

汽車は宮川に沿いごうごうと朝もやの鉄橋を渡った
白い霧がはれると山がすぐ裾をめぐらし
霜月のうすら寒い太陽が真上に顔をだした
家いえきとりまく柿の樹の植込みは
真盛りのたわわに垂れた橙の色も深く
柿紅葉の葉もつやめいて饗宴のひとときを拵げている
雨と嵐と雪など一年の営みは慟々と厳しく
安らい日とてなかった

生活にゆとりのある村人の落付いた足どりに

収穫の悦びが現れている

すでに白い土蔵の壁に串にさされて乾され
熟してゆく果実の醗酵する甘ずっぱい芳淳の香りが漂
っている

このあたり光寿庵という寺院の趾があつて
布目の古い瓦などが出土している。

岳麓詩信

寝ている人たちに愛音をしのばせて室をでた

所在なきに宿の下駄をはいて川原におりていつた

露でもむひきを濡らした若者が

ひいた露を背負って坂をのぼってきて

目頭があうと目礼して通りすぎた 朴訥に――

空気が冷えびえと甘く 高い位置に自分をたたせてい

ることが自覚される

仰ぎみる峻しく高い山の中腹に乳色のガスが流れ 頂

きが陽をうけて

樹々の層が油を盛りあげた絵のように

青黒く頭上に圧してくる

動らくことだけが自分のいままでの生涯のようで

ながいあいだ脳裡に去来した憧憬の土地ではあったが

きのうから幾たび岩風呂に身体をふかぶかとおめ

安穏と湯浴みしていたことか

和んでくる一刻の貴重な時の推移にしばらく奢りに似

たところで

その倅せを素直に享受せねばならない

蒲田川のこのあたりは伏流となって水の音も聞えず

川原には無際限とっていい大小の石塊で埋めつくさ

れ

自分も一つのブームの虜となって

石のあいだを奇石を求めて歩き

乗鞍を小さくしたような緑玉の石を拾って帰った

宿の廊下を仔鹿のように浚刺ととびあるき

羞しさも知らない十六歳だといった陽気な娘はその母

親と

自動車にのる私たちを送つてくると

一ぺんの儀礼の言葉とも思えない表情で

自分に一個の桂状をした茶褐色の美しい石を贈つてく

れた

振返ると遠のく車窓のうしろに小さくなるまで手を振

つていた。

取組

峻巖にひとの生きる日の毎日は

原稿用紙に一つの詩などを書いて

書き足して見たり

消して継いで見たり

改行してみたりするような

生やさしいものではない

まして土俵の上では、ついと取組み

「待った」などのない

寸分の間隙のない

肉体のじかに触れあう真剣な取組みである。

湯の宿にて

山岳にかこまれた湯の宿の朝まだき

眞夏というのに底びえする静謐な夜の続きなのに

雀や鶺鴒、うそ鳥などの饒舌が

湯づかれの身体をもつて憂く現実を呼びさまし

私はしばらく床の中で腹はい

その嬉々とした羽根のすり合わせる繁殖の

囀りの音をじつと聞いている

きのう高山からバスに揺られて登り

また羊腸の平湯峠の緑したたる樹液と

原色の盛りあがった色調が

網膜の底にはつきりと印象されている

窓をあけると斑らに雪を残した

四ツ岳の褐色の荒い岩肌が非情にまで

鋭い壁となつて偉圧するように立ちはだかっている

わすか一夜ではあったが恵まれた人生のこよない奇遇
は

私につきまとう意地悪い神様もきつと

貪しい一生の幾度とない饗宴に微笑され

祝福の言葉をそつと洩らされて

巖しい現実には垂幕を降ろされ

しばらく世間の現実と遮断されていよう。

あ　る　夜

うすら明るく窓を二十日ころの月が
のぞいているのであろう海の底のようにしずかで
寝所の蒲団のなかでさつきから眼がさめていた

時計が三時打つのを心で一緒にかぞえていた

——三十年まえ　結誓した記念に

貪しい出発の一ばん初めに購った時計

忠実なしもべのように私たちに

正しい時を刻んで　時を報らせてくれた

年老いた歌舞妓役者の団藏という

生前名前すら少しも知らなかつた俳優が

再たび梨園に戻らない決意を秘め

無常感にさそわれ遍路の旅にでて

身のまわりを清潔にととのえ

瀬戸の海に身を投げた新聞記事が

ここに、三日、私の胸中から消えず

生きる世の幕切れが非情なまで明るく切つない

眼がさえてくると昼のつづきの思惟に

ふたたびとりことなつて溺れていた。

新しい年に

ふたたび新しいふり出しに戻ってきた
いや過ぎ去ったいつの年の新年にも味えない
人跡未踏の高い山岳にむかったときの
心のたかぶる興奮があふれる新年である
そう思わなければ自分の脚はこの人生に躊躇してなら
ない

あの時若かった精神に夢を与えてくれ
はるか仰いだ高い山岳が塑像のように胸をふくらませ
バラ色に彩られた新年であると
いつも自分に反芻して言い聞かせた

自分は多くの取りかえせないものを
失しない 捨て 彼方になげうった
自分は多くの貴重なものを反対に
集め 拾い 手中に収めた

半世紀の越しかたが世俗的に敗地に塗れた現実であつ
ても

新年が訪ずれるとその一年を前にして
貪婪な希望の翼を限りなく拡げる
少年の日の想い出と少しも変らない
悔みと汚辱にみちた振り出しではない
今までのどの新年にも味わなかつた新しい感激！
心に期する多くのものを人に揚言せなかつとも
自分は新しい年の門出を寿ぎている。

峠
で

ふる里で母が病むという電話に
私のこころを顛倒させ、急いで自動車の客にしていた
秋が訪ずれかけた夜の神原峠を
車体をおもく軋らせ息苦しく徐むろに登ってゆく
母が娘のとき信州の製糸工場に幾たび通った峠
義父が馬車をひいて幾曲り米や味噌を運んだ道
不安なる顔を窓に思いつめている思念のひととき
すいっちよの声かこた声はつきり飛び込んできて
振り返ったが闇はすぐ余韻と山塊をつつみ
入びとの耳を緑色に涼しく一瞬洗っていった。

遠
足

初夏の太陽が緑りの毛氈にうららかにそそいで
心にかげる一きれの雲もそのすすしい瞳に浮ばなかつ
た

牧夫に随った仔羊のように脚並みを軽く

童児たちは白い握り飯とキヤラメルと果物を織やかな

背に負ね

恵ぐまれた收穫を心膜に記録した

まだ若かった母が風呂敷に包んでくれた夏蜜柑を
先刻からもてあましていた少年が
草土堤の上から遂いに転してしまい

叢らのあちこちからわつと喚声が上がった

耀け 果てしない金色の太陽！

匂え 敷きつめられた若草の絨氈！

貧富も階級も厳しい世の掟も無頓着で

あるものは大自然の懐ろに転びとろけていけばよかつ

た八歳の純情の日であった。

登 校

霜のいぶし銀に降りた道を二人の子供は

ランドセルを背負って学校にいった

妻が倦まずたゆまず毎朝お下げに髪を結いあげ

時に紅く時に黄色のリボンを飾ってやると

宿命のように素直で古風に

一つ違いの女の子はふた子のように仲良く

お手々をつないで家を出る

木ざわしの柿の実が一つ一つ朝の陽に耀やきかけた下

を——

その後「もりの小入」の歌声が合唱となり

余韻をひいて流れていた

倅せな無風帯な一日か今日も
ほどこかい学び舎に子供たちを待っている
父と母とが何か満ち足りた想いでうなずき
そっと顔を見合せ窓の硝子戸を開める。

早
春

せまい湯殿で埃りっぼい髪を洗った

雪が融けてトタン板に点々と滴が春を喚んでいる

今日街の花屋の飾窓でシクラメンの紅い花が
おりから舞う牡丹雪の白い花瓣に染ってふるえていた
春を待つ自分のように――

自分に成し遂げられると思つたもろもろの自信が
淡雪の消えるように遠のいていった
未経験はいつも若さを帯びていると思ひ
未たるべき花咲く時節を待つていたのに――

さわやかに濡れた頭髪をストーブに乾かし
一はいの番茶に喉をうるおした。

初冬の朝

庭の枯れた草のしとねのうえに
燦銀に耀きふかぶかと霜がおりにいた
佇っている脚に寒さが這いあかってくる
いいらぎの朱い実が五つ六つ
透きとおる簪のように垂れて
私はしばらく初冬の声を聞いていた
と――

一人の少年が足音をしのばせて
葉のおちた楓のしたにくると空気銃をかまえ
隣家の桧の繁みにさえずっている
群雀をじっとねらっていた。

菽柑子

正月を間近く太陽があたたかく照って
静かに音もなく霜柱かとける庭で
童顔の老翁が菽柑子の若木を幾本か鉢に移していた
籠甲の簪の珠のように朱いつぶらな実が
その顔に明るく映えて喜悅に興じている姿が
過誤もなく生き抜いた七十年の生涯を
静かに辿らせたことを語っている

棗の小枝で群雀が先刻から白い腹をふくらませ
暖かい日射しに何かを囀っている。

日記

三月二十一日

彼岸中日、風冷たく午後雪となる。
バスにて宮峠を降る、雑木林の處々に疎ら雪白く残る。

三月二十二日

昨日の降雪に比べ天気清朗暖かく、
裏畑に立てば土の香り鼻口に懐し、
折菜の花もつけない青葉の上を、
今年初めて白い羽根を擴げた蝶が、
嫋々と花粉を求めて翔んでいった。

独居

幾たび心にもない頭をさげ
くどくどと口をすっぱくして語った

街から——わずらわしい街の煩雑さから逃れて帰って

きた

我が家への細い路に入ると

藁芒が穂を揃えて明るく

なつめの樹は高い天に琥珀色の実を総らせていた

私にはよい仕事場が待っていた

独り鉛板に向って鉄筆をへらし

時を刻んでゆくことにしよう。

一つの感情

むやみに太郎を駈りたてるこのいちずへの想いは何も
のであろうか

太郎のほそい脚は仔鹿の柔軟さで

夏ぐさの繁った山路をすばやくかけ登ると

乗鞍岳が目の前に見える松林の丘がそこにあつた

亭々と空を摩して年をけみした巖しい風雪の歴史を

をいた松の群れがその赤い肌語っていた

そよ風がこびるように松の翠りに戯れると

黄色い花粉がほろほろと樹脂をはこんできて

その下にたつて見あげる太郎の頭に散りかかり

はじめて味うおとなになった感情が

細い胸盤をゆさぶった
やり場のない原始の劇しい感情に太郎は
ひとつの人生が開眼されたのを自覚した
乗鞍岳は把握されるちかい距離にあったが
駈りたてた一つの想いはすでにそこにはなく
推移する時間が幼ない太郎の胸のなかで時をきざみ
松籟の音のみがたかい梢の上で鳴っていた。

アマリリス

ひとが逝ってから その生きかたの尊さが
生前にもまして入びとの口の端にのぼり 語りひろが
ってゆくように
あなたが真赤な粧いを高貴に誇りたかくかがやかせ
園生に群がるもろもろの花たちに抜きんでて 咲き競
っていたのはやっとこの間のことでしたのに
いまは緑のふとい茎にすかれた花の残骸を
欲呆けた媼おきなのようにみにくくしがみついているのは
あなたの生きかたが華麗で豊饒であったのを知ってい
る私に

なおやり場のないみじめな挽歌を

あなたが奏でていられるように思えてならないのです
あなたがいきのいのちをしほませて散り

花期が一応終りを告げた時から

私のこころのなかにいきいきと鮮烈に甦って咲いてい
るのは

なんと不可思議な啓示でありましようか
でもあなたは巡ってくる来年という日月が

また新しい開花を約束されていますの——
でも愚痴になりますから自分に残された人生について

語りますまい

一度の花も咲かせず 自分を語る誇らしいこともなく
たぞがれる園生にたっている私です。

石いし ぶみ
碑

落日の陽をうけて高台の墓碑だけが明るく安定の座を
占めている

うすい緑りの磨かれた太江石の石碑の肌
にも私も小学校で習字を教った恩師の筆で

墓碑の文字が丹誠をこめ力づくよく刻まれている

故里からうつした新聞の墓地公園の石碑の下に

父と父の遠い祖おたちの白い骨を埋め

芒の穂が揃いかけて揺れる赫つちの坂道をおりてきた

大正七年の秋も晩く 父が流行のスペイン風邪に冒さ
れ逝かれて来年は五十年になる

八十歳になられる母の生きていられるうちに
まずしくとも五十回の法要を営まねばと
あすは母や弟妹たち血縁のものをむかえ
有難いお経を誦し供養しようと思つてゐる

父もそして杏とよい血脈のものたちが
地下にあって予期もしなかつたであろうはるはると
墳墓の地を離れて運ばれ

異域の場所に眠ることになつた宿縁を――

私だつていつか墓石の下からあはかれて

いずこの土地にふたたび移されないと確言はできない

激動する劇しい対立の世界の情勢を看ていると
こんな行為が空疎なあだごとごとに思えてならない

阿片のように一とき自己を感溺させ

世間の常識に忖えた感傷であつても

生きながらえて亡くなつた父の五十回の法要をあけら
れる境涯を

素直に甘受して喜ばねばならない

あすは懐しい弟妹たちと膝をまじえ

睨にらみのなかに生きてゐる父の面影を回想して語ろう――

唐突に蝸蟬しよがかなかなと余韻をながく一声だけ鳴き

閑けさがまたまえより深く襲つてきた

山すその湿つた落葉の古い層に足をひんやり沈ませて

は驚き

芒の道を振返つてはおりにきた。

仔熊

近所に小さい熊を飼っている家がある

昼 その鉄の太い檻の前を通ると

孤独なる散歩者である熊は

狭まい檻のなかを狂えるように咆哮 往来していた

夜 冷めたい独居の檻の前にたつと

冬を越した熊は観念の思いに

折からの月の光りに照らされ藁莖にじつと寝ころんで
いた。

黒き犬

長くふり続いた雪がやんで

夕暮がその雪の背を去ってくる

山につづく坂道を軀まで埋める雪をこざいて

一匹の黒い犬が思案にあまった面もちでのぼっていた

自分の貌にときどき現れる不安と憂愁

世を掬ねた拳動に似る孤独なる二つの瞳

その奥に人も棲まぬ雪路を

幽かに残光に照らされ何かをもとめて

犬はのぼっていた。

雪景

遅しい脚の獵犬は慣らされた技巧とその本能で
獲物を見つけ雪煙りをあげて飛んで行った

藁で作ったはばきを足に巻き

標かんじきを履いた獵師は銃を肩に

ゆっくり名優のように落付き迂迴していった

清流は一ときわ音をとどめ

樹氷をわたる木枯も一瞬止み

舞台は一発の銃声を待っていた。

秋刀魚

この秋も秋刀魚を焼く匂いに季節を捉えた

秋の訪問者伊達すがたの素肌

にぶい陽光に底深く神秘に冴えて

寄らば切ると泰然と振り返った裸身

天地初発の日無名であったそなたに

「秋刀魚」と奉った民族の慧智よ

敏感な季節の日本の詩人よ。

行路

雪は霏々と降ってやまない
窓一つ明るい家があつてまどやかな
田楽の声かながれ生き惱む人生の行路を
去りがたくそこに佇っていた

冬の日の雪の降る日はかり
我が生きる世にもあるまい
幸いはたどりつく彼方の
その極みにもあるものと
雪をかき雪みちを吾はゆく。

胡瓜

ぼくの体内を緑り状の液体が逆流し
生きていて夏を掴んだことが自覚される

もぎたての胡瓜が観念のホゾをかため
まな板のうえにでんと転がり断罪の時を待った
いつの世でも正直者が馬鹿を見るさ！

やがて 洋裁師のように自信あるおんなは
果汁のなかに私の人生を没してまった。

洋 燈 (一)

子供の頃の暗い夜が再びかえってきた

磨かれた火屋と室内をたちこめる石油の匂い

父がいなく母の頭に白髪がふ之額には疲れた年輪が老
いそぎざんだ

妻と子と生活にうとい少年であったわたくし

生きる日はせつなく寒むざむとした生活の脅威

洋燈のほそぼそとした灯りに奇跡でも待つように顔を

揃えてむける

父の顔を見まもる子供たちのおじた瞳

チ　チ　と地虫の鳴くように

洋燈の芯は身をもやし続けている

私は岳から吹きおろす水枯を聞いている。

訪 問

雑巾をもつと露ぐさが咲き野菊が二輪三輪ほころびか
けた小路を流れに下りていった
晝の蟋蟀が登おとに鳴き声を止めず叢をふるわすよう
に啼いていた

今日これから都で大きい雑誌を編集している人と会う
ことになつてゐるのだが
なぜか足の裏を洗つてからでないといひたいと思
つた

流れは秋の色いろな草ばなを映して清しく
汗かにじんできるとの好い陽がそそいでいた。

小 菊

―故里の老いたる母上におくる―

子供たちが軽く寢息を夜具の上に波うたせ
更けてゆく部屋に静安が訪ずれると
机の上の小粒の群咲きの白菊が
しんしんと匂つてきてあなたへ思索がはじまる

菊の咲くころ生れられたあなたのお名前のように
お母上よ ふくいくと私語くように

匂っているのは小菊なのでしようか

眞実に子供のために生涯をかけてこられた

七十年にちかい一途への捨て身の愛情

秋も逝く今宵ふる里の家の懐しい二階の

暗い灯のもとで昔ながらのおさの音を

とんとんとたて機を織はたっていられるお姿が

とだえがちの虫の音にまじって浮んでくる。

山の湖

険しい路であつた。氷壁にゆく手を遮ぎられ、ははまれ、身をよせた絶壁で一歩踏みはずすと深い千仞の谷底が口をあけて自分を呑もうとしている。脚に傷を負い、目がくらみ、身を托した尖った石に腕のしびれるような圧力をかけて生死の間を彷徨する。一つの岳を越えろとまたより峻嶮な次の岳が毅然と聳えて行手をとぎす。稀薄になつた空気がひりひりと咽喉を痛め、山麓で唇をうるおした谷の真清水の音がよりようりと耳の底に聞える。疲れた足に重たいリュックがかかんだ背を圧して這うように次の岳に目を移す。生き抜かねばならない。どうして自分だけこんな苦行に生き

ねはならないのか、どこかで子供たちの声がする。「お父さん！」夢寐のなかにも忘れられない分身の懐しいその声、それを背後に聞いたようにおもい踏みこえなおも山嶺めかけて登攀のピッケルを岩壁の尖った肌にかチンと打降して登ってゆく、獣のように登ってゆく。

急に視野がかわった、濃霧が切れて遠のき、さっき越してきた岳々は遙か彼方にはじらうように薄く化粧している。生きていてよかった、夢幻のなかの記憶をひとつひとつたぐり寄せるように、わたしの視覚と聴覚の覆幕がはがれ、焦点がととのえられ、現実の自分に還って、周囲を見廻すと湖水の傍にたどりついていた。美しく清澄に透きとおった水底の小石までが一粒一粒数えられる碧い水が、やさゆさと豊かに満たされ

かって人跡の印されたことのないその周囲の岸边には名も知らない白い花が繚乱と咲き乱れ、汚辱を知らない処女の瞳のように美しく見開いていた。漂う白雲を胸まで白く粧った岳々と、緑の若芽を吹いた櫟や樺の若い林が、まつげのように繁り逆さに影を落していた。うるんだ優しい智慧を現した湖水、焰のように青く燃えて抱擁しようとする深い愛情、清楚に清々しく孤高に誇りを秘めて誰か訪なうものを待っている湖水、情感にほとばしり溺れるわたしの胸の鼓動も言葉も知らず、さざ波一ったてず山上の湖水は理智と哲理に輝き冷厳に千古の静寂を破ろうとしない。ここは人煙のほるか遠い禁断の孤園、地図にも載っていない破滅の湖水であらうか。

画 布

——亦は絶望の書——

小さい原紙の枠のなかに業因のように終日鉄筆で文字を彫っていると、神経が細く磨りへらされ、疲れた手をやすめ握った鉄筆をはなすと、うずきかゆい指頭を軽くもみほぐし、はれほったい虚ろな瞳をその画布にうつす。この頃の自分の沈澱したおりのような空虚な心に似て、この絵を画いたという顔も知らない女のひとの絶望的な幽暗な鬼神が近く身辺にそくそくと襲ってくる。死に滅入った暮れちかい灰色の海は、潮騒の音すら聞えない。海と遙か水平線がみわけがたい一つの線でかすかに区切られ、前面の砂丘に濃いセピア色の荒っぽく盛りあかつて塗られた岩壁に短艇が半身

海に向っている。作者の描かれた主題がここに僅か集中されているのであろうが、主のない短艇は、死への終局を暗示し、あるいは生への脱出を物語っているのであろうか、古道具屋の主人が説明するその女画家はもはや此の世には生存の綱を絶った人であるかも知れない。そんなことは自分に関わりもなく、埃りを払って店頭から私の仕事場に運ばれてきて半歳、悲喜こもごも私への不思議な親愛の情感をそそり伴侶となってきた。己に齡い五十になんなんとして頭髪に白いものが交り人生の峠は見えてしまった。越しかたの道は険しく未耒へつづくこの道も同じであらう。絶望の砂丘にたつて、無明なる沖合いを見上げる瞳に盛上る濃い群青の海は何と思索を迫るのであろう。

コスモス

幾度かの颱風にもまけずコスモスは細いなよなよし
た茎にいま薄桃色の花瓣を群がるように粧おわせた。
この花を見るたびに私は日本女性に負わされた宿命と
いったものが象徴されているように思われてならない。
種子も蒔かないのに春さき裏畑の隅などに何本かのコ
スモスが芽吹いているが、それが秋になると一丈にも
居く草だけになって、うだる三十度の暑熱にも風速十
五米の風雨にも抵抗し、折れそうदैて折れもせず遂
に花瓣をつける。薄いせんさいの緑の葉と淡紅色の花
この対照の清潔さ、真紅の花はあくどくて好きになれ

ないが、コスモスはやはり淡紅色に止めをさす。

一日、秋の陽がさんさんとふり濯ぐ午後、鉄筆で痛
む指を撫でながらその丈余の花茎のもとに佇った。『
コスモスが咲きますと、今年も済んだと思つて寂しい
ですね』と、近くの夫人が挨拶して通られる。ぶんぶ
んとかすかな羽根の音をたててこの花苑に集つた無数
の蜂が僅かに残された命を存分生き抜くように飛んで
いる。蜂の命と私もなんの違ひがあろうか。やがて迫
ってくる恂々たる長い冬の足おと、しかし花瓣はなに
も知らぬげに、今日一日を優艶に粧いをひろげている。

洋らん燈ぶ
(二)

少年の私は洋燈らんぶのホヤの掃除係りであった。七、八寸の製材屑にホロをまるけてしはり、ハアハアと息を吹きかけて磨くのであったが、ホヤは正直もので美しく澄明にみかいておくと、喜んで精いつはい明るく応えてくれた。骨おって磨いた洋燈に石油を満たして吊り、味噌汁に葱の香などたちこめると、貪しくとも夕餉を待つのは楽しかった。早くおとなになって働き家を興さねばと独り誓う少年であった。

若かった母は土間で糸をひかれた。繰り棒がカラコ口とまわると、鍋の中の繭が白い蝶のように踊り、身は薄くはがれて昇天してゆく。私は面白くそれを見守

っていた。「大繭を五つ鍋もひいたぞ」と母は子供らへ炎天の路地へ打水をしたように声をはずませて仕事をしまわれる。ガランとした室に天井から吊るされた洋燈、その下で捻げられる貪しい夕餉、父と母と幼ない弟妹とそして私——。

私はいつも自分の存在を洋燈のようにありたいと願っている。暗い星明りほどもない絶望の人生、私の少年時代のように、光りを求められなかった人生——暗い世間の人たちに私は燈ともびを点じよう、明りをともそうと。たとい二分しんの洋燈のように細いほのくらい灯であっても、百燭のネオンより時に親しみはあろうと。

悔悟

囲炉裏の楷火の煙りがもうもうとたちこめ、立つこともできない屋根裏の二階で、灯をともすと柱や板壁は自ずとにぶく光りをたたきよわせた。貧しい父の末歴をあらわした煤ぼけた暗室、晝でも灯をともさないとあやめもわからない二階、釘づけの小さい粗雑な机と石油箱の書籍箱と、その上においた細い裸の豆ランプ、でも嬉しかった誰にも侵されない自分だけの城郭、自分の室と名づけるものをもった喜び、瞳をこすり涙をながしひたひたと潮のように押しよせたはるかかな人生の窓、夜になるとまだ若かった母がもうもうと煙る階下の炉端で、『明日の勤めに障るで、早ようやすまにや』

と、言い慣れた言葉で繰返す。

見えそめた世の中の矛盾や不合理が小さい胸を日ごとめきめきと締木のように締めつけてきても、混りけのない瞳はいつも反撥し、将来への正しい足かかりを得ようと豆ランプのように燃えていた。暗黒の中を匍いまわる蟬の蛹にも似て、幼ない魂をゆさぶり、一日と内なる精神を共生えさせ培ってくれた、未知なる世界への扉を叩いた読書、清々しい詩集の一節や心のかかぶる小説の一章に、自分にもこんな素晴らしい数々の言葉で、人びとの魂を惻々とゆすぶり温たまらせることができたなら、その時真実に自分が生きるのだと、細い胸にこんこんと言って聞かせたものだったのに、その古い煤ぼけた家は壊され、新しい家が建って既に二十余年の歳月は過ぎ、父は逝き母は老いぼけたのに――。

墓 地 で (二)

故里を離れて生活するようになって二十年経った。時たま故里に帰省すると、きまったように町を一望できる先祖の墓に詣でることになっている。子供の私の肩のあたりまで背が低くなり、白髪のとみに増した母はよりそってきて、大きくなった子を見上げ、「よんべの夢見がよかつたら、ひよつとするとおみか帰るような氣がしたよ。」と言う。その朝は霜が深くおりて裏庭の白い捨て菊などをかかえて墓にゆくのだ。「とつ、あまの大好きな水やった。」で、と、藤波橋の上手の石段を転げるように下りて、こんこんと湧いて出る水を汲んでくる。父と後ぞいの夫と二人までここに葬

った母は、年ごとに氣が弱く信心のころがきざしてきて、念仏講などに精を出しているという。

私は昔も今も神や仏をあるともないとも思わず、ひたすら人びとに損をかけない生きかたに、信じあい助け合う生きかたに、後生も極樂もその日々の現世のなにかにあると思ってきたが、故里に帰った時はつとめて逆ろうことなく母に随って、お寺やお宮に詣でることになっている。老い先きの短かい不幸なる母の生涯を思うと信心のころをかき乱したくないと思う。

こうして母と子と語りいてゆく日がもはや幾度恵れることであろう、孝行することもなく老いを刻んでゆく母、責められる言葉もなければなおさら四十の子は自責の鞭に打ちひしかれる。

鉦山のある故里の町は帰省するごとに変貌を加えて

き、機械の響音と煤煙は町を覆っているようであるが
墓地のみは昔の郷愁をじつと堪え、冬のちかいにぶい
秋の陽のなかに透くように碑は立っていた。

湯の宿にて (二)

宿の三階の窓をあけて湯にほてったからだを乗りた
すと、四ツ岳の截りたてた荒々しいセピア色の岩壁が
肌のところどころにまだ残雪を白く耀かせている。

きのうバスに揺られて降りてきた、つづら折り幾曲
りの平湯峠は緑りに盛り上った油絵のようにむんむん
と青い樹液を発散させていた。栃は白い花を真盛りに
飾り、蘆郁と窓からそれとわかる匂いが忍んでくる。
白樺の樹は若葉の間にこの世の穢れを知らぬ童女のよ
うに清純にはにかんでいた。春蟬と幼ない鶯の声が競
って鳴き、ここでは春と夏が同じ画布のなかに棲んで
いて、記憶は逆さに廻転させたフィルム影写のよう

に、きのうと今日の連関が遠い涯のように思えて、秩序ある時間を整えるのに私は少し冷静に時間の推移について考へなければならぬ。

ながい親たちの労苦の営みがようやく理解される年齢に達した四人の子供たちに、好意ある餞けの言葉に奨められて、妻と二人いっしょになつてはじめて九里の道をいで湯の客となつた。澄んだ太陽の光りとオゾンに満ちあふれた高原のいで湯の、夏の訪ずれの晩いここでは夕暮は早く岳々の肩よりすべり落ち、家においてきた、留守をまもつている子供たちのことが驟雨のように心のうちを通りすぎる。

生きていてよかつたと思う日は数多くあつた、苦しい日々の営みであればこそ生き抜きたかつたのかもわからない。永かつた或は一瞬のように過ぎた、三十年

に近い吾々の越しかたの日記に特記される好日であつた一日、自分をもてあます潛上の沙汰にまゆのごとく幸わせにくるまり、蟬時雨の音を天じようの声のように聴いてひととき忘我のなかにいた。

飯山寺詣で

―円空さまに―

暖かい日がつづき、春がそこまできかかっている、雪国の人たちが待ちのぞんでいるひそやかな願いを容赦なく、気象はかわり急霰のように山岳のきざわしをおり寒さを運んできて、雪はまたあつい山巒の裾を刷毛で薄白く化粧していった。

鉄道線路を横ぎると道は急な坂道にかかる、こその秋散りしいたなら、くぬぎ、くりなどの落葉の道は朽ちたまま枯葉は原形をたもって茶褐色に彩られ、風景をひとしを寒むざむとしたものになっている。訪ずれる人も少ないこの道を、過去にいちども信仰ももたない、末世も浄土も信じたこともなかった不逞の徒の自分を

狂気のように気まぐれに自分を導いてゆくものは――
自分をいぎなつてゆく目にみえない大きい引力は――
自分の靴音を独りきいて、ともすると枯葉の上にふつた雪にすべり、身体を中心をあやつりながら登っていた。

微風にさそわれて樹から落ちる雪が綿のように首すじに忍んでくるのに、オーバアの襟を立てて登ってゆくと笹むらの笹かつやめいて鳴りさざめき、そこまできたおそい春の息吹きを感じさせる。

あなたも杖をひいてこの笹鳴りの音をきかれてしばらく腰を伸ばされ佇ちどまられたのであろうか、東向山飯山寺の堂宇にあなたが彫られた鉦はつりの二天の尊像が二体安置されていて、そのかすかに笑み給える微笑のゆえに、ながい間の思慕に心がひかれていたこ

とかやっと自覚されてきた。

ゆきどまりの小高い丘がちようと雪の屏風をたて廻したように、よく数百年の風雪にたえて堂宇が聖くしずかなたたずまいのうちに寂れ建っていた。

雲について

遠い空があかね色に染った山脈の上を脚^{はや}迅く、雲は裳裾をそめて南から北へ泳いでいった。鴟^{もす}が疝^だたかい尖った鳴き声を雑木林にこだまさせるひととき、所在なげにゆきくれて雲は北から南へ流れていった。或は乗鞍岳が緑り濃く神祕に衣粧し妖しい魔女の精のように、白い肌を誇らしく見せて下界を眺めいるとき、雲は羞じらんだ少年のように内気な表情でその麓の谿々を漂眇と渡っていった。或は夕陽に銚^ささきをバラ色に耀かせて目路はるか加賀の白山が沈んでゆくとき、雲は峰々の上に巖かに一日の憩^{やす}らいの足をおとした。

山に囲まれ平和に明け暮れた盆地の人たちは、狭ま
い天地の此の国に伝承された千年の独特の技術や文化
または思想の花を華麗に咲かせた業績も、久しい世紀
の時間が闊していった地上の裔すえの者たちに、弊履にも
似てとつくに忘却のかなたに追いやられ、枯れた骨々
は土中ふかく盲いの爬虫を繰りかえず。あの日遮つて
いったみずみずしい白雲の去来が、少年の眼窩に焼き
つけられ、一劃の老松のもとに眠り呆けている私に影
像が新しく甦えり、亀甲の松の肌を傳つてくる露のよ
うな甘美な樹液を、夜ごと仙女のように喫っていた。

夜の廢園の記憶

— たかぶれる夜の幻想 —

人びとは帰っていった、水底のように薄青い樹液が
夜霧にまじって流れる夜を——かえで、ヒマラヤヒマラヤすぎ
みずまつ、ひのきなどの樹々が孤独な影をおとし憂愁
を訴える細い路を——先刻この庭園の茶亭の明るい窓
を領していたさざめきは無限の廣い空間に吸いとられ
て、今そこを支配するものは樹蔭にかくれている魔女
の吐く妖しい息吹きと、裏を流れる川より莊園の茶亭
のうえを飛び交う川千鳥のさびしい鳴き声と、寒い空
に高く輝いている月の光り、銀の穂をふるわして揺ら
ぐ芒の群れ、葉の散りおちた葉の樹にはいずらう藤づ

るのさやさやと散る落葉、それは晩秋の荒涼とした風物であつた。

○
眠りより覚めた少年は高樓の窓から今宵もその庭園に似た荒み果てた憂愁と孤独のただよう庭園を見おろしていた。いままで明るい窓のむこうの室でなにか営まれていたか知ろうともしない。少年の小さい胸を潮のように襲っているものは、死のように迫ってくる寂寥、華やかな時の過ぎゆく足おと、それが理窟なく人生の懷疑に胸は火と燃えている。かつて経験したことのない諸々の感情が熾烈な火となつてはげしく鼓動うち薄い胸にたえがたく去来している。人生とは何物を指標し、何を捕えてゆけばよいのであろうか。少年は確かに異常にたかぶつた病的な精神を自覚している。

○
細い二本の脚を匍はつてくる寒さは上体にのほり、今は堪えがたく、明るい障子から瞳をはなして寝ねがたい床に入ろうと、ふたたび人びとの去つた樹蔭の障子に瞳をうつす、その時さつと障子が開けられて月光のなかに浮きでた白い顔の女はくるくると音をたてて雨戸を開める。何事もなかつた平安な一日が終焉を告げるように——暗くなつた庭園の外には月光が燦々とふりそそぎ、年ふりた雨戸の木目が鮮やかに春慶の塗物のように浮彫りされて耀く。過ぎゆく時間の推移、胸をうつ鼓動の響きにもそのうらぶれた庭園の風情は少年の胸に奈落の寂寥がなだれのごとく襲い、じゅ、ふたんの赤い敷物の上にくずおれるように倒れてしまった。

忘我のうち、時が過ぎた。

あなたはもはや其處にいない、あなたはいすこかへ立去った。わたくしのそばを白蝶がとび、谿に沿って白い衣粧を繚し去っていった。冷んやりと風が頬を撫で、頭髮をなびかせた。ひとり谿岸の小石原を歩いて大きな巖にくると、滴して落ちる水をうけて山葵の葉が緑の風にそよぎ、白い花はあなたの貌のようにわたくしを招いている。

あなた

あなた、またはお前、あるいは君よ、どういうふう
に呼んでもあなたは怒りはしない、憤りはしない。面
とむかつてあなたに対して、そこにあなたは実在し
ませず、光りも影も落さない。声をあげてあなたを呼
んでも、声は虚しく空間をなかれ、返辞は再び還つ
てこない。感ずる者にはいつもそこに在り觸れること
ができる。六歳の幼ない日からわたくしの血肉のなか
に棲みついて、いる親しみふかいあなた。ある夕暮は忍
びやかに胸の底を持病のように訪ずれてたたき、失意
にくれた花散る公園のそぞろ歩きにふと孤絶に似た堪
えがたい寂寥をふりそそぎ、また時として突如、都会

の雑踏の歩道に時雨のような慟哭の涙をふりしほつて
ゆく。生を享けて地上に生れた瞬間から、あなたの方
へわたくしは走るように、または追われる病み犬のよ
うに歩いている、一瞬の休息もなく。あなたはわたく
しの方へひたひたと厳肅に、歩武堂々と時秒を遣えず
近づいている。あなたは地上に棲む人間に獯猛な兇器
を振りかざし、正確で平等、冷酷非情な運命をはこぶ
奇術師でもある。

巻末に

昭和三十三年春「禁獵区にて」を出版してから十年ちかく、その間高山で発行される新聞や同人誌に発表した作品ならびに戦後作品で、前著に掲載できなかったものなど六十六篇をもつてこの詩集を編集した。

前著によつても想像はできるのであるが、本詩集に対して、世間がいかなる批評をくだすか、またいかなる詩壇の位置を示すかということなどは、私には妄念であるがよくわかるのである。古風で、自然主義的で、低回趣味で、恐らく文学的には革新、新鮮味などというものは一かけらもない。朝日新聞が「今日的な意義といったものを別にすれば、平凡でつましい生をいとおしむ心が、山国の自然と溶け合つてかもし出す叙情は清潔。」と、この過分？の批評紹介は、今度の場合も大同小異であろうと、寂しくはあるが自認せねばならない。平易で、観念的でただ自己の周囲をぐるぐると、目隠しをされた馬が、庭で、よそ見もせず一本の中心の木に縛られて絶えず回転しながら勞働する中国の風景を昔ながらでみたことがあつたが、そのように私だけは社会や政治というものに、目をあうて自分を凝視してきた。謂うなれば私の詩は、小説でいえば、私小説に対していふと同じで、詩型式で自分の回りを描いてきた。面白くもない、作者といえどもや

りきれない感慨である。

しかし反面、現代の多くの人たちが、自己や人間、社会というものを洞察し、自己の精神に厳しく立ち向うという態度が欠除していることは、現代の大きな病患であると思う。人間不在の物質万能文明や、高度に機械化された社会機構は、人間本来の生き方の根本的な過ちを冒し、人間が從屬的に生きてひきずられていくといつても過言ではない。ひとつこのころで本来の人間性をとり戻し、せめて静寂なる朝のひと時、夕暮の陽の沁む一瞬、草原で、巷の一割で自分の心に諍かに自問してみるのも決して悪いことではない。勿論、私は自分の作品がそんな反省の一助となるなど、超越な精神は毛頭もっていないが、こういう世俗的には敗者の生き方も、好むと好まざるにかかわらず、業苦のように私に課せられた宿業であると思つている。

一昨年から原紙にむかつて筆稿し、去年は忙しくて一枚も書けず、今年にはいつてまた版をみて製版してきた。もう還厓もまぢかく目前にむかえ、孫たちも三人にふえようとしている。そうした境涯を思つて四十年以上詩作をしてきたことは、無駄な詩業に、再び巡つてこない貴い人生をかけたことが、悔やまれ、哀れに思われてならない。

幸い私の子供たちは、詩などに一人も興味をもたず、愚かな父の所業に冷然としていてくれることは、私には一つの救いでもある。

妻や子供や、また老いた母に慙愧の念を以って一言ここに記しておきたい。

ご覧のようにこの詩集は内容、印刷とも、詩集の草稿のようで、世間の識者の
鑒賞を賣うことと思うが、私はまた、浅薄な内容とともに、こんな読み捨てる型
式の装釘もそれなりに気楽でよいと思つている。仕事着のように、普段着のよう
に、晴れがましい所に飾られもできない作品。しかしこれが本当の意味の真蹟版
なんだかなア、とも思つている。

ともあれ既に自分の処から飛びだしていったこの分身は、もはや作者の意志を
離れて行動するだろう。

一つの峠の頂上に立つてまた次の入生の峰に對つてゐる。限られた生を充実さ
せるために、更に生活し、思索し、詩作して生き抜いてゆかねばならないと思つ
ている。大方の忌憚のない御批評、御叱声を賜らんことを。

昭和四十二年九月八日

初秋の岳のよく晴れた日

和 仁 市 太 郎

詩集 薄暮記 目次

序 詩	1
今は遠く	2
薄暮記	4
老 樹	6
之にした(金雀児)	8
山路で	10
山清水	12
墓地で(一)	16
キヤンプの夜	18
葡 萄	21
霜の降る夜に	22
辞 書	24
孤り坐して	26
梅雨の朝に	28
血 脈	30

ある夜	66
新しい年に	68
峠で	70
遠足	71
登校	73
早春	75
初冬の朝	77
藪柑子	78
日記	79
独居	80
一つの感情	81
アマリリス	83
石碑	85
仔熊	88
黒き犬	89
秋刀魚	91
行路	92
胡瓜	93

雉	32
春の音	34
菊を移す	36
落葉	38
万年青	40
サルヒヤの路	42
独白	44
遠花火	46
老梅	48
鶴 鴿	50
祭りの日に	52
夾竹桃	54
蟋蟀	55
路傍で	56
柿紅葉	58
岳麓詩信	60
取組	63
湯の宿にて	64

洋燈	(一)	94
訪問	96
小菊	97
山の湖	99
画布	102
コスモス	104
洋燈	(二)	106
悔悟	108
墓地で	(二)	110
湯の宿にて	(二)	113
飯山寺訪で	116
雲について	119
夜の廢園の記憶	121
岳麓の谿にて	124
あなた	127
巻末に	130

和仁市太郎著詩集

「暮れゆく草原の想念」 昭和八年八月十日刊 絶版

「石の独語」 昭和十四年二月十五日刊 絶版

「禁獵区にて」 昭和三十三年四月二十日刊 絶版

詩集 『薄暮記』

昭和四十二年十一月三日発行 頒価 金一〇〇円

著者並に
印刷者
高山市森下町一丁目三十五番地
和仁市太郎

発行所

高山市森下町一丁目三十五番地
山脈詩派社
電話 二一三五六九番

號外 十一月廿九日

第百九

日 一 號

號外 十一月廿九日

第百九

日 一 號

號外 十一月廿九日

第百九 日 一 號

第百九 日 一 號

42.11.3